

夢野久作「死後の恋」にみる恋物語ロマンス

——「私」なるものをめぐって

西川 貴子

だから私は約束を守つてゐます。貴下を愛してゐます。何処へなりと御一緒に参る決心をしてゐます

(皆川正禧訳「幽霊船」『ワグネル物語』一九〇八・四、内外出版協会)

有名なワグネルの〈さまよえるオランダ人〉は、自分一人に愛を捧げ、自分にかかった呪いを解いてくれる女性を求めて漂泊し、最終的に愛を捧げてくれる乙女と出会って、彼女の死により呪いから解放され昇天していく。はたして呪いを解く恋愛とは何なのか。夢野久作「死後の恋」(『新青年』一九二八・一〇)の「私」もまた〈死後の恋〉を満足させて死ぬことを願ひさまようが、しかし彼には救つてくれる相手はいない。「死後の恋」は、むしろこの恋愛こそが呪縛となっている物語だ。

本作は、シベリア出兵時の「浦塩」(ウラジオストク^②)を舞台とするもので、町で評判の「キチガヒ」とされる「私」(コルニコフ)が、「立派な日本の軍人さん」である「あなた」に対して、自らが体験した〈死後の恋〉の真实性を認めてもらうために、その体験談を語るといふ一人称独白体の小説である。ロシア革命により家族を失った、元貴族の一人息子で、つい最近まで白軍に所属していた「私」は、同じ軍隊に所属していた親友の少年兵士リヤトニコフから身分の高い貴族出身で、

その身分を証明する貴重な宝石を所有しているという秘密を打ち明けられる。しかし、赤軍の攻撃にあい、一人生き残った「私」が目にしたのは、木にぶら下がった仲間たちの死体とともに、下腹部に宝石を撃ちこまれた女性の死体。リヤトニコフの死体だった。そしてこの血塗られた宝石を見たことにより、彼女の「私」への〈死後の恋〉を確信した——というのが「私」の体験談である。

小説は「エツ……エ、ツ……私の話が本当らしくないつて……」……ま、待つて下さい……。／ああ……／……アナスタシヤ内親王殿下……」という言葉で結ばれ、リヤトニコフがロマノフ王朝最後の皇帝の娘アナスタシヤであることが仄めかされて終る。

一見、荒唐無稽な筋にみえるものの、しかし同時代評をみると、例えば「死後の恋」は筋はあつけないが文章で終ひまで読ませた(妹尾アキ夫「マイクロフォン」『新青年』一九二八・一一)や、「夢野久作「死後の恋」これと同じやうなタネは北明一派からも貰つてゐるが、かうして完備したものを読むと更に面白い。宝石を下腹部に撃ちこむところなど感心した^③」(大伴黒主「マイクロフォン」同)と、ストーリー自体はそこまで奇想天外ではなかったことがわかる。また江戸川乱歩は、「負傷して居た主人公が、見渡す限り何もない野原の中に、コンモリとした森があつて、その中に激しい乱射乱撃の音を聞いて、それが突然

静まつて、何も聞えない」という場面を取り上げ、「大変い、と思ふ」「これは現在の戦場の光景なのです」（『夢野久作氏とその作品』『探偵春秋』一九三七・五）と、戦場の光景としてリアリティがある点を賞賛していた。

このように「死後の恋」は、ある種のリアリティ、「本当らしさ」を備えた作品だった。先行論でも、この小説の「本当らしさ」については触れられている。畑中佳恵「夢野久作『死後の恋』の『宙ぶり』効果」（『九州大学大学院比較社会文化』二〇〇一・三）では、トドロフが「幻想」を定義する上で用いた「ためらい」の概念を援用しつつ、作品内の読者の役割、「本当らしさ」、一人称の語り手という観点から、本作が「真偽の判定をめぐって『宙ぶり』状態になるという『読者の役割』を内包している」ことを明らかにしている。本作が信頼できない一人称の語り手による真偽の不明確性を有しており、読者を「宙ぶり」状態にするという点やロマノフ王朝の生き残り皇女や宝石の噂が当時あったこと、実在するウラジオストクという場が「本当らしさ」を形づくっているという指摘に、本稿も異論はない。

しかし、畑中論の中心となっているのは「宙ぶり」構造の分析であるため、「本当らしさ」の指摘は事実の指摘に留まっているくらいがある。また、細川涼一「夢野久作・湊谷夢吉とアナスタシア伝説」（野村幸一郎ほか編『表象のトランス・ジェンダー——越境する性』二〇一三・三、新典社）は、生き残り皇女アナスタシヤ伝説をいち早く脚色した小説として本作を紹介しているが、素材の新しさという点での評価に終始している感がある。

本作を読み解く上では、発表時に形成されていたイメージと作品内の事象との関係を再考する必要があるだろう。また、作品内時間と発表時の時差についても見逃せない。本稿ではこのような意識の下、この

時期、ロシア革命やシベリヤ出兵時の記憶を想起させ、それを恋物語として提示することにどのような意味があったのかについて検討していきたい。

1、アナスタシヤをめぐる物語

まず作品内の時間を確認しておこう。作品内では、「今年（大正七年）の、八月二十八日の午後九時から、翌日の午前五時までの間」が「今から三ヶ月前」にあたると明言されており、本作の語りの現在が一九一八年一月であることがわかる。既に畑中論でも指摘されている通り、一九一八年八月に日本はシベリヤ出兵をしているため、作品内のように、赤軍の襲撃を受けた白系ロシア人の「私」が、日本兵の「あなた」と「浦塩」で出会う状況はあり得そうなことであり、「私」が「あなた」に語るという設定に無理はない。実際、ロシア革命後、日本軍がシベリヤ出兵した際のウラジオストクには、「ツルゲニエフの書いた美しく楽しいロシアの貴族そのまゝの暮しであった」のに「折からその夢を破る革命に追はれて東へ東へと逃げて浦潮」へとやってきた白系ロシア人が男女を問わず多数いたとされている（『漂泊のロシア人』『東京朝日新聞』一九二五・一・二三―二六）。例えば、出兵時のシベリアの浴場では「浴場専門の白粉のロシア美人」「生活に逐われてからの素人女」がいたことが、「女房や娘に淫売をさせないで暮せる国家に生れたのは幸福だ」という感想とともに語られている（伴太郎「シベリアの風呂」『新青年』一九二七・一）。また彼らはウラジオストクだけではなく、ウラジオストクからハルピン、そして日本へと渡ってきており、「この人達の落て行く先は何処か？」（『漂泊のロシア人』前掲）、「運命の冷酷な鞭に打ちのめされ、浮浪人の群に入り、世の人々に見はなされ

てしまう」(モオリス・ヒンダス「満州見たまゝの記」『国際パンフレット通信』一九二八・九)と、祖国を失ってさすらう「漂泊のロシア人」は、もはや帝政ロシアの再興が不可能なことが本作発表時にはわかっているだけに、憐れみの視線の下、広く受容されていた。「死後の恋」の「私」はまさに、このような典型的な「漂泊のロシア人」であった。

その上で、さらに「私」の語る内容自体についてもみていく。例えば、「私」が配下となったセミヨノフ將軍は当時白軍の將軍として実在するし、「私」が詳細に語るニコラス魔帝の子どもの構成(アレクセイ皇太子、オルガ、タチアナ、マリア、アナスタシア皇女)や一九一八年のロマノフ王家皇室銃殺報道などは実際の報道とも重なる。加えて、銃殺から逃れた皇族がいたらしいという噂も実際に飛び交っており、なかでもタチアナとアナスタシヤをめぐる物語は日本でも人気が高かった。

例えばタチアナについては処刑報道の前から亡命報道があり、菊池寛の小説「たちあな姫」(『我鬼』一九一九・七、春陽堂)でも、シベリアから逃亡しハルピンを経由して東京駅にタチアナが現れるという情報を得て向かったものの人違いだったことがわかった後、タチアナが銃弾を受けた上、撲殺されたことを知って憤慨する記者の逸話が描かれている。また「死後の恋」の翌年に発表された貴司山治の小説「チタの烙印」(伊藤好市名義『新青年』一九二九・四)は、ウラジオストクで偶々出会った白系ロシア人貴族の娘を処刑場から救出した日本軍の通訳・坂本の物語となっている。結婚後、娘が実はタチアナ姫であったことを坂本は知り、畏敬の念を持って妻に仕えていたが、しかしそれも偽りで、本当は共産党員の女スパイだったことが判明する。すでに妻を愛していた坂本は結局、自身も共産党員として活動するようになる――。タチアナは、一九一七年の革命直後から、逃亡説や生存説が広まっていたことがわかる。

一方で、アナスタシヤに関していえば、特に一九二五年以降、たびたび話題にあがっていた。一九二八年の新聞では次のように報道されている。

故前露帝の忘れ形見アナスタシア姫と自称する若い一女性が一両年前突如パリに現れた時世間はその数奇な運命に同情を注いだ、ところがそれ以来各地にアナスタシア姫と自称するものも幾人も現れた、そしてこの最初の姫のみは依然真物だと自称し堂々とニューヨークに乗込んだ、だが故露帝の近親者等は容ばうも声も人柄もすべてア姫の幼児に似てゐないと否認のステートメントをだした(『果してアナスタシア姫か』『東京朝日新聞』一九二八・一一・二九)

記事では、このアナスタシヤが「真物」であることには否定的だが、しかし古荘国雄「悲劇のヒロイン(アナスタシア姫)」(『第一線に立てる女性』一九二七・四、金星堂)では、おそらく同一人物と思われるアナスタシヤを「真物」とし同情を誘う物語として紹介している。生き残り皇女の中でもアナスタシヤが本作で選ばれているのも、アナスタシヤが四姉妹のなかで一番若く、一七、八歳の少年兵士に変装するという作品設定に適っていたというだけでなく、細川前掲論文が指摘するように、作品発表時にちょうど生存説が話題となっていたこととも関わっていただろう。いずれにせよ「私」が語る通り、リヤトニコフがアナスタシヤかもしれない、処刑から逃れた皇女がいたかもしれないということは、事の真偽にかかわらずあり得そうだと思わせる土壌があった。

しかし重要なのは、単に当時、生き残り皇女の噂があり本作の「本当しさ」を演出しているということだけではない。アナスタシヤをはじめとする生き残り皇女の物語は、他者に自身が誰であるか、自身

の体験の真正性を承認させるのは簡単でないことを示している。例えば「悲劇のヒロイン（アナスタシア姫）」では、アナスタシヤの逸話は次のような形ではじまる。

彼女はたまらなく悲しかった。前露皇帝ニコラスの末女、神かけて間違ひもないこの事実を、何故世間は認めてくれないのか。

（古荘国雄「悲劇のヒロイン（アナスタシア姫）」『第一線に立てる女性』前掲）

アナスタシヤと名乗るものの、信じられず、一時は「気狂ひ病院」に収容されてしまったというこのアナスタシヤのあり方は、実際の真偽は別にして、リヤトニコフとの〈死後の恋〉を語り、誰からも信じられず、周囲から「キチガヒ」とみなされている作品内の「私」とも重なる。このことは、小説内のこととはいえ「チタの烙印」において、坂本の妻で共産党員の女スパイがタチアナとして振る舞えたことと対照的だろう。彼女がタチアナとして存在できたのは、坂本がそれを信じてくれたからに過ぎない。

もちろん「私」は、アナスタシヤやタチアナのような世界的に注目される有名な存在ではない。しかし「私」は自らの体験を、「ロマノフ王家の末路に関する」「極めて真剣な、歴史的に重大なお話」として、いかに歴史的に重要な経験を持つのか、ロマノフ王家の末路を語る歴史の証言者として自らの存在を承認してもらおうとしていた。このように歴史の証言者たろうとする点では、多くの自称アナスタシヤたちとも「私」は共通している。「私」が語ろうとしているのは、「私」の恋物語であると同時に国の歴史、国家の物語であり、それが「歴史」として認められるためにも、物語は誰かと共有される必要があった。

2、「私」なるものをめぐって

では、改めて語り手である「私」とはどのような人物であろうか。「キチガヒ紳士」と評判で、さらには「私は失礼してお酒をいたゞきます」と酒を飲みながら語る、この語り手が、夢野久作の多くの一人称独白体の語り手と同様に信頼できないことは、ここではひとまずおき、「私」の語りの中から見えてくる人物像をみていこう。

「私」はペトラグラードの革命（一九一七年）で両親や財産を失い、「自暴自棄」になって白軍の隊に加わったという経歴を持つ。また軍隊の中で、特にリヤトニコフと親しくなったのも、「純な王朝文化の愛惜者」であることがわかり「涙が出るほど話がよく合」ったからで、お互い「貴族の血を享けてゐる」と推察していた。「私」の語りの中では、この「貴族の血」ということが再三強調されていく。

「貴族の血」は、「私」の「持つて生れた臆病」な「軍人らしくも無い性格」を説明するだけでなく、「私の家は貴族の癖として、先祖代々からの宝石好きで、私も先天的に宝石に対する趣味を持つて居りました」「私の血管の中に、先祖代々から流れ伝はつてゐる宝石愛好欲」があると表現されるように、「私」の宝石への執着と分かちがたく結びついていた。この執着は、「私」の意思とは関わりなく先天的に受け継いだ、「私」を構成するものの一部であり、「私」を「私」たらしめるもののなのである。

そして、このことは、リヤトニコフが語ったという宝石にまつわる話とも結びついていく。リヤトニコフの両親は、リヤトニコフに次のような形で宝石を託していた。

……この露西亜には近いうちに革命が起つて、私たちの運命を

葬るやうなことに成るかも知れぬ。だから此家の血統を絶やさな
い、万一の用心の爲めに、誰でも意外に思ふであらうお前に此宝
石を譲つてコツソリと此家から逐ひ出して終ふのだ。〔…〕さうし
て今一度私たちの時代が歸つて来るのを待つことが出来るであら
うと思ふ。

……しかし、もし其時代が、なか／＼来さうになかつたならば、
お前はその宝石の一部を結婚の費用にして、家の血統を絶やさぬ
やうにして、時節を見てゐるがよい。さうして世の中が旧にかへ
つたならば、残つてゐる宝石でお前の身分を証明して、此家を再
興するがよい……。

宝石は、貴族の血、家の血統を絶やさないために必須のものであり、
「身分を証明」するもの、いわば貴族の象徴ともいふべきものだとい
うことがリヤトニコフの家でも共有されている。それは「過激派の主義
から見ればコンナものは、まるで麦の中の泥粒と同様」で、ペトログ
ラードでは「ダイヤや真珠が溝泥の中に棄てゝある」など、貴族にし
かその価値はわからないものなのだ。したがつて、「私」の論法に従え
ば、「リヤトニコフの宝石の幻影」をみ、戦場泥棒のような「浅ましい
望み」を抱きリヤトニコフたちの死体がある戦場跡に向かつて宝石を
求めてしまうのも、「私」の中に流れる貴族の血がなせる業なのである。
「私」がリヤトニコフの死体の中に宝石を発見した場面をみてみた
い。

彼女は、すこし遅れて森に這入つた爲めに生け捕りにされたもの
と見えます。さうして、その肉体は明らかに「強制的の結婚」に
よつて蹂躪されてゐることが、その唇を隈取つてゐる猿轡ゑんじの癍痕あざ
でも察しられるのでした。のみならず、その両親の慈愛の賜であ
る結婚費用……三十幾粒の宝石は、赤軍がよく持つてゐる口径の

大きい猟銃を使つたらしく、空砲に籠めて、その下腹部に撃ち込
んであるのでした。〔…〕その処の皮と肉が破れ開いて、内部か
ら掌ほどの青白い臓腑ルビがダラリと垂れ下つてゐる。その表面に血
まみれたダイヤ、紅玉、青玉、黄玉トパールの数々がキラ／＼と光りなが
ら粘り付いて居りました。

リヤトニコフの身体と一体化し、その貴族の血にまみれた宝石。こ
の宝石をみた瞬間に「私」は、「彼女は私を恋してゐたに違ひありませ
ぬ。さうして私と結婚したい考へで、大切な宝石を見せたものに違ひ
ないのです。……それを私が気付かなかつたのです」と捉え、「自分の
死ぬる間際に残した一念をもつて、私をあの森まで招き寄せたのです。
此宝石を私に与へるために……此宝石を霊媒として、私の魂と結び付
き度いために……」と語る。しかも、「御覧なさい……此宝石を……。
此黒いものは彼女の血と、弾薬の煤なのです」とあるように、リヤト
ニコフの血は「あなた」に話している現在においてもまだしつかり宝
石に痕跡をとどめている。

ロマノフ王朝の宝物をめぐるのは、例えば「怪露人宝石を密売す」
〔東京朝日新聞〕一九二二・一一・二二という記事で、ロマノフ王家の宝
石を一部、奪取して日本で密売しているロシア人がハルピンに逃走し
たことを示す報道があるなど、皇帝一家が処刑された後、種々の貴金
属、宝石や宝物が掠奪され散逸したという噂が実際には多くみられる。
また夢野久作も後に「書けない探偵小説」〔新青年〕一九三四・一一
で、死んだふりをしていたレーニンが現われ、ロマノフ王家の王冠が
欲しくて革命を起こしたと語るといふ筋を披露していた。このように
ロマノフ王家の秘宝は、同時代では人びとの欲望の対象として印象づ
けられていた。だが同じくロマノフ王家のものと思しき本作における
この宝石は、「私」の所有欲を刺激するのみで、他の人には拒まれてい

く。このいわくつきの宝石は、リヤトニコフと「私」の結びつき、貴族の血の証として存在しているのだが、しかし、それは「贗せ物」とされ、他者にとっては価値を持たないものとされてしまう。「私」に寄り添って考えれば、それは単に「私」のような貴族の血統でない者には価値がわからないからということになるが、その真贋が作品内ではわからないまま終るように、結局、何が本物なのか正しいのかは、判断する相手によるものなのだ。このように本作においては、「私」の信じるもの、「私」の自己証明となるものは全て否定されていく。

その上で、「私」がリヤトニコフとの兄弟同様の関係を語る際に「……と云つても決して忌はしい関係なぞを結んだものではありません。あんな事は獣性と人間性の矛盾を錯覚した、一種の痴呆患者のする事です」と激しい口調で同性愛的関係を否定していた点に注意したい。これは、リヤトニコフが宝石を託された際、貴族として家の血統を絶やさないための結婚が重視されていたことも関わっている。すなわち「私」やリヤトニコフたちにとって、血統を絶やさないための異性愛結婚のあり方が倫理規範となっていて、それがわかる。そして、こうした異性間の婚姻関係を重視し、同性同士の恋愛を「正常」とは異なる「変態恋愛⁸⁾」とみなす考えは、作品発表時における日本の恋愛観とも重なっている。

周知の通り、一九二〇年代には厨川白村『近代の恋愛観』（一九二二・一一、改造社）がベストセラーになるなど、日本では恋愛ブームが起きていた。「Love's best」として、「恋愛は即ち性を異にせる二つの個人の結合によつて、お互に「人」としての自己を充実し完成する両性の交響^{シフオニイ}樂に外ならぬ」という厨川の「霊肉一致」の恋愛観は、性欲を恋愛のもとに肯定した上で恋愛至上を謳ったもので異性間の結婚を前提としていた。また、「死後の恋」の掲載誌である『新青

年』でも、性科学の立場から正木不如丘が「恋愛の神秘」を解き明かすべく「恋愛学」なるものを連載していたが（一九二九・一一〇）、ここでも性欲を介して恋愛が進化していくことを強調し、異性愛を前提とした自由恋愛に基づく結婚が恋愛の「正しい」形態とされていた⁹⁾。

先述した通り、「私」が〈死後の恋〉を伝承していくことに拘るのはロマノフ王家の歴史物語を伝承していくことを欲するからであったが、同時にリヤトニコフの変わらぬ「私」に対する愛情を「宇宙間に於ける最高の神秘」だと称揚していく背景には、異性同士の恋愛を至上のものだと捉える思考がみてとれる。また自己の存在証明として恋物語を語るという「私」のあり方は、恋愛が「人」としての自己¹⁰⁾完成の物語であり、「恋愛こそが人生そのもの」という同時代の恋愛観にも通底している。

しかし「私」の語る恋は、リヤトニコフがこの世にいない以上、血統を継続させるのは不可能だ。では、これは肉欲を離れた魂の結びつきととれるのだろうか。だが、そもそも、この恋はリヤトニコフが死んだ後に「私」が彼女の臓腑に残った宝石から勝手に確信したもので、リヤトニコフのことを同性だと信じていた「私」は彼（彼女）への恋心を否定していた。「霊媒」といっても宝石が何か言葉を話すわけでもないで、リヤトニコフの意思は不明であり、魂の結びつきというのは「私」の想像（妄想）に過ぎないともいえる。

ただし、ここで注目したいのは「私」の語る〈死後の恋〉が「恋愛」とよべるべきものなのかどうかということではない。「私」は〈死後の恋〉について、「彼女の恋に対する私の確信」といったり、自分の話を信じてくれない人びとに対して「彼女の「死後の恋」を冷笑する」といったりするなど、「彼女の恋」と表現していた。しかし「信じて下さる。……ありがたう」と、「あなた」がいったんこの話を受け入れた

と思しき時はじめて、「私の恋を満足さして下すつた」と、「私の恋」といふ言い方をしている。そしてその際、「死後の恋」の存在は、やっぱり、真実でした。私の信念は、あなたによつて初めて裏書きされまして」と、「やっぱり」存在する、「初めて裏書きされ」たと発言しており、「私」自身もこの恋が半信半疑だったことが露呈されている。同時代でも「恋愛は形式を与へられて始めて恋愛としての価値が出て来る情操である」といわれている通り、「恋愛」として正当化されるには、社会において共有された一定の「形式」を備える必要があったことを「私」のあり方は示している。誰かに信じてもらえさえすれば「私の恋はもう、スツカリ満足してしま」うものであるという点からも、「恋愛」と名ざされるものが社会的な承認を必要としていたことが暗示されている。

したがって「私」が宝石を通して関係を結ぼうとしているのは、もはやリヤトニコフの魂でもなく、現在、この「浦塩」の「秩序を保つて下さ」っている「きつと日本でも身分のあるお方」で「吾々同胞の気持に対して特別深い、行き届いた理解力を持つ」ち社会的信用が高い「あなた」となっている。

「私」はこのように、自身がいかに「乞食やキチガヒで無い」か、歴史の証言者であり稀有な恋愛をした人物かということを主張していくのだが、このように「私」が周囲の評価を気にする根底には、「私」自身の価値観が関わっている。心理学を大学で学んでいた「私」は、先述した通り同性愛を「一種の痴呆患者のする事」といい、またリヤトニコフから宝石にまつわる告白を聞いた際には、「此青年は一種の誇大妄想狂みたやうな変態的性格の所有者では無いかしらん」といって、自身の理解に及ばない行為を前にした時、すぐに「正常／異常」という枠組みで捉え、病として意味づけようとしていた。しかし現在におい

ては、その立場は逆転し、「私」はみなに理解できない話を語り続けるがゆえに、「戦争が生んだ一種の精神病患者と認められて、白軍の隊から逐ひ出され」排斥されている。二四歳にもかかわらず、たった一夜で四〇歳くらいに見えるほど髪の毛や髭を白髪にし、「私を魂のドン底まで苦しめてこんな老人にまで衰弱させてしま」つたという「私」の戦場での体験、そのトラウマは、決して誰にも共有されなまま、「戦争が生んだ一種の精神病」として類型化され、病として処理されてしまうのである。ここには、「病」として意味づける側と意味づけられる側が容易に反転することが示唆されている。と同時に、「現在の私が、若し人々の云ふ通りに精神病患者であるとすれば、其時〔引用者注／戦場で仲間の凄惨な処刑死体を見た時〕から異常を呈したものに違ひありません」と、「病」という意味づけを半ば受け入れているように、「私」が依然として「正常／異常」という捉え方から脱していないことを示している。そしてだからこそ「私」は何とか「正常」な人間として認めてもらおうと必死に抗っているのである。

次節では、このように社会的な承認を求める「私」の恋のあり方について、同じく「浦塩」を舞台とし白系ロシア人の恋物語を描いた夢野久作の「支那米の袋」〔新青年〕一九二九・四〕と比較して考えてみたい。

3、「支那米の袋」における恋物語

「支那米の袋」は、「死後の恋」の翌年に発表された小説で、先に挙げた貴司山治「チタの烙印」と同号に掲載された作品である。この作品も、「死後の恋」と同様に日本の軍人「あんた」に「あ、……すつかり酔つちやつたわ。……でも、もう一杯のカニヤツクを飲ましてちや

うだいね……」と、酒を飲んで酔っ払いながら語りかけるといふ一人称独白体の小説である。ただし語り手の「妾」は「落魄男爵の娘」からレストランの踊り子になったワーニヤという女性となっている。作品のあらすじは次の通りだ。

「妾」は、レストランの客でアメリカの軍艦司令官の息子と自称するヤングから「自分の相手をまだ可愛がり飽きないうちに殺しては又、新しい相手を探し／＼して行くのが亜米利加で流行る一番贅沢な遊び」であり、日本では「一番ステキな」「恋愛の遊び」があると教えられ、二人で減茶苦茶な遊びをしていくうちに、「いちめられる気持ちよさ」「た、いてゐる間の気持ちのよかつたこと」を覚えていく。ある日、アメリカへ帰ることになったヤングから、内緒で連れていきたいので麻袋の荷物に化け密航することを提案された「妾」は船に乗る。しかしヤングは「妾」をはじめ他の女性を騙して船に積み海外で売る計画を立てており、それが上官に見つかつたため、麻袋ごと女性全員海に捨てたのだと、海から救助された唯一の生き残りの「妾」は、警察から聞かされる。その後レストランに戻って働く中で「妾」は「あんた」に出会い、「あんたがたまらない程可愛くなつて来るに連れて、あのヤングが云つてゐた色んな言葉の本当の意味が一つ／＼に新しく、シミ／＼とわかつて来」て、ヤングから教わつた遊びを教えたくなり、ついに「今夜こそイヨ／＼本当にあんたを殺さう」「日本の「一番ステキな」遊びである「シンデウ」を決行しようと、短剣を使って「トテモ気持ちのいい、心臓と心臓のキッス」をしようとする。そして物語は次のような語りで終幕する。

睡らないでサア。サアつてばサア。……い、わ。妾あんたが睡つたつて構はないから……そのまんま突き刺しちゃうから……い、こと……？ねツ……死んで呉れるでせう。ね……い、こと……殺

しても……嬉しい……ぢや……お別れの乾杯よ……ね……さうして寝床へ行くのよ……サア……

「妾」から一方的な恋物語が語られる点は「死後の恋」と一緒だが、しかし「妾」は恋愛を「遊び」とも呼んでおり、「死後の恋」における「私」のように「宇宙間に於ける最高の神秘」などと神聖視していないし、同時代でいわれるような「よりよき子孫への生命の持続」など考えていない。「妾」にとつては、もと男爵の娘という身分も今の自分が誰かということも関係ないし、相手の国も身分も関係ない。自分が最初に好意を寄せたヤングと「ソックリ」というだけで「あなた」を選んでおり、何よりも「気持ちよさ」を優先させている。警察や他の人たちがいうヤングの人身売買についても「お前さんたちが云つてゐるのはみんな嘘だ。ヤングはそんなに悪い人間ぢやない」と自分に都合よく解釈し、それを逆手にとつて今度は自分の好きなように自身の「恋愛の遊び」を実践しようとしていく。「死後の恋」の「私」が他者に自身の証言者としての立場や恋物語を承認してもらふことを欲していたのに対して、「支那米の袋」の「妾」は、他者からの了解など求めていない。それどころか「妾あんたが睡つたつて構はないから……そのまんま突き刺しちゃうから……」と、相手にさえまともな返事を期待せぬまま、半ば強引に自らの「遊び」＝「恋愛」に引き入れていくとする。

このように、両者はともに「漂泊のロシア人」として表象されているが、「支那米の袋」の「妾」が自身で恋物語を完結させていくのとは異なり、「死後の恋」の「私」は恋物語を自身で結ぶことができない。それは、「私」が自身の恋物語をロマノフ王家の歴史とも繋げて、国家の物語として語ろうとしていたこととも関わっているし、第三者から保証してもらわずには「恋愛」として「私」自身も信じられなかつ

たためでもある。祖国を失おうが「気持ちよさ」を求めて自身の「遊び」に満足していく「妾」(女)と、同じく祖国を失ってもなお国の物語や貴族の血、恋愛の正当性、「正常／異常」という価値づけに固執し続ける「私」(男)。¹⁴「妾」は、自身の「気持ちよさ」を「遊び」と呼んだり「恋愛」と呼んだりし、その名づけに固執してはいない。「支那米の袋」の「妾」と比較すると、「死後の恋」の「私」がいかに多くのことに囚われているかが顕著になるだろう。そして、それらがすぐに揺らいでしまうような、いかに不確かなものなのかも暗示されている。

革命という大きな変化、既存の価値観が転倒するような事態に直面しながら、それまでの価値観から離れることができず、様々なものに囚われながら、「私」はただひたすら自分の物語を承認し共有してくれる相手を求めさまよい続けるしかない。もはや〈死後の恋〉は「私」にとって逃れられない呪縛となっている。本作は、そんな囚われた男の姿をあえて描き出しているのだ。

4、ロシア革命とシベリア出兵の記憶

最後に、この時期、ロシア革命やシベリア出兵時の記憶が想起されていることの意味について考えたい。夢野久作は父杉山茂丸の仕事場であり、世界中の情報網をもって活動していたという台華社の関係者から「死後の恋」や「支那米の袋」の構想を得たといわれている。¹⁵夢野が国際情勢に強い関心を抱いていたことは想像に難くない。

「死後の恋」が発表されたのは、ロシア革命から一年経っているが、この間、革命後のロシアの状況はたびたび話題となっている。¹⁶例えば、尾瀬敬止「浅い春に鳴く雀」(『新青年』一九二九・六)では、「革命のゴタ／＼騒ぎに生れなければならない産物」として、両親や家を

革命で失った「哀れな孤児」が「新しいロシア」で事件を起こしている様がグロテスクなものとして紹介されている。また実際にモスクワに滞在した中條百合子は「金持と王とをふりすて、新文化を求めて居る」といった変化を読みとりながら、しかし、シベリアの村ではまだ一つも学校がないという状況やクレムリンの城門から首斬台に向かって林立する十字架と皇帝の紋章を見て、民衆の恐怖と支配者の魂にあって他の何処にも無いよきものを持たうとして居る。同時に、他のどこにも無い巨大な未完成と困難を持つて居る」として、期待とともにいまだに混乱が続いていることを語っていた(『モスクワの印象』『改造』一九二八・八)。この他、旧来のロシア教会への信仰を確固として持つ者とボルシェビキを支持する者との村内での対立が描かれるなど、¹⁷革命後のロシアは渾沌とした場として語られていた。中條が「ロシアの民衆は彼等の人生を先づ頭で、或は心臓の一手手前で受けとめる道具として何ものも持つて居ない。イギリス的常識も、又は日本の所謂義理も」と「彼ら」特有の性質として捉えていたように、その混乱は「日本人」の私たちとは異なる彼らの物語としてみなされがちであった。

しかし本作が発表された前年の一九二七年には、日本は第一次山東出兵を行なっており、その後も第二次、第三次と出兵が続くなど、中国・日本・ロシアの関係が取り沙汰されるなか、過去のシベリア出兵が再び議論の俎上に載せられていた。

西比利亜の腹芸は成功したか。否、否、失敗も失敗、我開闢以来の大失敗である。数億の国費を靡爛した事は改めていはいぬ。西比利亜の水に屍を埋めた二千の壮丁をどうしてくれる。尼港で失った七百の老幼の魂をいかに慰めてくれる。そればかりではない。斯の如き無名の干渉を為して失墜された我国の信用を誰が回

復してくれるか。(清瀬一郎「西比利亜出兵の責任者は誰ぞ」『改造』

一九二七・五)

この他、「我々は隣邦の兵乱にのぞむには彼の西比利亜出兵の苦い経験をも回想せねばならぬ」(満州出兵と我国の態度)『中央公論』一九二六・二、「シベリー出兵当時の如く、当初の目的を半途に至つて屢々変更し、終局虻蜂捕らずに終つて、徒らに国際的反感を大にし、巨額の国費を空費するが如き失態を演ずることは断じて許し難い」(我等の主張 出兵と用意)『読売新聞』一九二七・五・二九)と、中国への出兵と重ねられながら、シベリア出兵は失敗の記憶、忌避すべき事態として呼び起こされていた。作品内の「私」が縋ろうとした日本軍は、シベリアで「秩序を保つ」ことができずに失敗に終つたことを一九二八年時の読者たちは知っている。また、いまなお混乱は続き、もはや「漂泊のロシア人」の帰る場所はないこと、さらにいえば国際的な緊張関係が高まり、場所が変われどシベリア出兵のような「苦い経験」が再度繰り返されつつあることも、一部の読者には感知できたのではないか。

シベリア出兵をなぞるかのような出兵が行なわれている作品発表時の現在において、「漂泊のロシア人」やロシアで生活する「彼ら」を優越的に見つめる読者たちの拠つて立つ場も不安定たり得ることを本作は仄めかしていた。「私」の物語を冷笑する聞き手たち、さらにいえば、その聞き手の立場で作品を読んでいた読者たちにとって、この物語はまったく無関係なお伽話としては語られていない。乱歩が賞賛した本作に描かれる戦場の光景は、単なる絵空事としてではなく、国際情勢が徐々に緊迫していくなかで、他の読者にもリアリティをもつて迫っていく可能性があった。

本作は、信用できない語り手による独白体という形式を使うことで、語られた内容の真偽を解き明かせない謎としてことさらに残し、最終的な判断を読者に委ねていた。そのような形式を用いて、語り手がどんなに固く信じていようと、周囲から承認されなければ、あの宝石に象徴されるように「贗せ物」とみなされてしまうこと、またどう解釈するかは聞き手に任されていることを炙り出していたといえよう。信じるものが否定されながら、しかし自分を救ってくれる相手を求めて、様々なものに囚われてさまよい続ける「漂泊のロシア人」——その姿は、同時に彼が囚われ続けるもの——血統や、国家、恋愛といったものの内実がどのようなものなのか、自己存在を示すものとは何なのか、読者に問い返し再考を促している。

注

- (1) 題名の訳は他にも「さまよえるオランダ人」「飛びかうオランダ人」等がある。この物語は厨川白村『近代の恋愛観』(一九二二・一一、改造社)では「穢れた吾等の生活が浄められ高められ償はれて、無限悠久の生命を得る」ような「女性の愛」の例として紹介されている。
- (2) 本文は「浦塩」だが「浦潮」「浦塩斯德」など表記は色々ある。本稿では、引用文以外では「ウラジオストク」で統一する。
- (3) 国枝史郎(『大伴黒主』)がいう「同じやうなタネ」がどういうものかは不明。梅原北明が『露西亞大革命史』(一九二五・五、朝香屋出版)を共訳していたこと等を考えると、ロシア革命に関連する筋だった可能性がある。
- (4) ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』(三好郁朗訳、一九九九・九、創元ライブラリ)
- (5) 「廃帝一族弑殺説▽公式葬儀も済めりと云ふ」(『東京朝日新聞』一九一八・七・一七)、「露国皇族銃殺」(『読売新聞』一九一九・二・一四)など。情報は錯綜していた。
- (6) 「タチアナ姫で騒がせられたのは日本許りでは無いと見えて最近倫敦へも姫が現れたといふのでモーニングポストなどで大騒ぎをしたが結局無根といふことが分つた」(…)尚米国でもタチアナ姫が来るとして新聞紙が騒いでゐる

- る」(『青鉛筆』『東京朝日新聞』一九一八・一・六)等の記事がある。
- (7) 『第一線に立てる女性』ではベルリンにいるとされている。この女性は一アンナ・アンダーソンを指すと考えられる。アンダーソンについてはA・サマーズ、T・マンゴールド『ロマノフ家の最期』(高橋正訳、一九七七・六、パシフィカ)や細川前掲論文に詳しい。
- (8) 『大思想エンサクロペデア 一九』(一九二八・七、春秋社)の「同性愛」の項目には「男性同士又は女性同士の恋愛。一種の変態恋愛である」とある。正本は「よりよき子孫への生命の持続への欲望こそ、此世に最も正しく最もかぐはしき恋愛となつた」として恋愛の根本に「生殖本能」を置き、その上で、「恋愛あつてこそ人」「恋愛は人生そのもの」と恋愛の重要性を説いていた。この他、帆足理一郎は「恋は性欲の人間化されたものである。夫れは性欲の一段進化した様式であつて、恰も花が葉の進化変形したものであるのと同様であらうと思はれる」(『聖き愛の世界へ』一九二二・九、博文館)とするなど、同様の言説は多く見られる。
- (10) 正木不如丘「恋愛学」(前掲)
- (11) 注10に同じ。
- (12) 畑中前掲論文では、夢野久作『ドグラ・マグラ』(一九三五・一、松柏書房)をあげ、本作に「精神異常という名付けの行為が問題化される土壌」をみている。
- (13) 注10に同じ。
- (14) 社会的・政治的制約に囚われない女性の造型は「ココナツトの実」(『新青年』一九三一・四)の「妾」や「氷の涯」(『新青年』一九三三・二二)のニーナなどにも通じる。「氷の涯」におけるニーナの描かれ方については、拙稿「虚構都市〈哈爾賓〉の〈混沌〉―夢野久作「氷の涯」における建築表象」(日高佳紀・西川貴子編『建築の近代文学誌(アジア遊学)』二〇一八・一一、勉誠出版)参照。

- (15) 杉山龍丸『わが父・夢野久作』(一九七六・一〇、三一書房)。龍丸によると、台華社は、陸海軍、日本の政財界、中国政府、アジア各国の独立運動、黒龍会、玄洋社、共産党、無政府主義団体、医師会、学者関係の団体等とネットワークを持っていたという。なお夢野の日記によると、本作を『新青年』に送ると決めたのは一九二八年七月二五日である(杉山龍丸編『夢野久作の日記』一九七六・九、葦書房)。
- (16) 社会主義者の山川均が「たゞロシアのプロレタリアの勝利のみは、荒寥たる曠野のうちに全世界の被抑圧民族を導く火の柱のように輝いてゐる」(『ロシア革命十週年』『改造』一九二七・一二)と評価する一方で、「ロシアのソヴェート政権が、その主張と主義といふ外皮をばげば、帝政とそれほど相違しない」(清澤冽「革命ロシア十年の経過を見る」『中央公論』一九二七・一〇)といった否定的な見解が出されるなど、節目としてロシア革命の意義が問いつ直されていた。
- (17) 和田軌一郎「小露西亜旅行」(『改造』一九二六・七)
- (18) 革命後のロシアと中国との関係をめぐっては、例えば「日・支・露問題討議」(福田徳三、戴天仇、後藤新平『改造』一九二七・四)などで議論されている。

付記

本文の引用は、『定本夢野久作全集二』(二〇一六・一一、国書刊行会)に拠った。引用に際し、旧字は新字に改め振り仮名は適宜省略した。引用文中の「…」は省略を、「／」は改行を示し、傍線・傍点は全て引用者による。

(同志社大学文学部教授)

